第 16 回北海道アルコール・薬物依存予防、早期発見、解決市民フォーラム
2023 年 10 月 21 日（土）　かでる 2・7　820 会議室
医療職員による研究発表Ⅰ－①

自傷行為と自己表出サポートとの関連について

〇看護師Ａ　看護師Ｂ
医療法人耕仁会札幌太田病院　急性期治療病棟

【はじめに】

松本は自傷行為を「苦痛を生き延びるためのアディクション」と捉え、アディクションを繰り返すうちに自殺の意図を徐々に高めてしまうことを指摘している[1]。厚生労働省の月間年報によれば「10～19 歳」の死因トップは自殺で[2]、その原因は「自殺念慮の表出が少ないから」[3]と言われている。今回、当病棟の自傷行為を繰り返す若年者に対し、看護介入を実施し自傷行為と自己表出との関連性を振り返った。その結果を報告する。

【対象者】

10～20 代前半、5 名（A～E 氏）

【方法】

自傷行為のある対象者全員に(1)自傷行為をしない約束をしてもらう(2)自傷行為をしたい気持ちの程度の把握をする(3)自傷行為する前に職員に知らせるよう指導する(4)日常、衝動性に関与する行動に注意し観察する(5)職員間で情報共有しサポートする。

【実践経過】

A 氏～E 氏の 5 名に入院時から(1)を説明した。全員の同意を得たが、1 名がリストカット、2 名が手首を引っ掻く行為に至った。(2) の欲求を把握することは難しく、担当者を決めて表出した気持ちを肯定的に評価できるように (3) へ繋げた。 (4)自傷行為の引き金となる要因を観察した結果、家族と面会や通話後、他患者との関係性で、苦痛が生じる時に衝動性が見られることがわかった。(5)看護者が対象者の近くで見守り、ゆったりとした時間を持つ。日常会話から本音を吐き出せるよう工夫し、多職種で共有した。

【考 察】

市川は「思春期症の日々の生活の中で彼らが行っている努力や挑戦を見つけ出し一つ一つ評価して認めていく、作業のなかで彼ら自身の生きざまを肯定していくことが長い目で見ると大切である」[4]と述べている。今回、対象者 5 名中 3 名に自傷行為が見られたが、エスカレートする行為には至らなかった。看護者が対象者と日常会話の中でポジティブフィードバックに努めたことが自己表出し易い環境へと繋がったと考える。しかし、有効なエビデンスはこの時点では見いだせなかった。今後の課題は、自傷行為の引き金となる周囲との関係性、自傷行為の置換、ピアサポートなどである。また、退院後の生活の中で自己表出ができているかの継続調査を行っていく。

【参考文献・引用文献】

1)松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか　―子どもの薬物乱用―児童青年精神医学とその近接領域　59(3)：278-282(2018)

2)令和 4 年(2022)人口動態統計月報年計(概数)の概況

3)山田敦朗：自殺の現状と予防対策　―COVID-19 の影響も含めて―子どもの自殺

4)市川宏伸、横山史隆：こころの科学NO.127/5-2006 特別企画　さまざまな現場における自傷行為　自傷行為　児童・思春期の自傷行為